ジブンイロ=vibgyor=

ちぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジブンイロ＝ｖｉｂｇｙｏｒ＝

【Ｎコード】
Ｎ２６１２Ａ

【作者名】
ちぐ

【あらすじ】
白黒の小人エモと、透明の小人チョン。色の町で色を持たないわたし達に、あの憧れの、綺麗な虹を輝かせる事はできるのかな。自分の事が好きになれない人に送る物語です。

第一話　ｗｈｉｔｅ

そこはとてもきれいで、みんなの笑顔が輝く町でした。

「よいしょ、よいしょ……っと」
小人のエモは、大きな真っ黒いお鍋を運んでいました。
抱えるのに精一杯の大きさの物なので、エモの細い腕は悲鳴をあげます。
「重いよぉ……」
何度も何度も休憩をとって、汗を拭き拭き、エモは歩き続けました。
カラフルなお家。カラフルな小人。みんながエモとすれ違います。

そこはとてもきれいで、みんなの笑顔が輝く町でした。

けれど、エモは笑ってはいませんでした。
エモは、白黒の子。色の無い子だったので、感情があまり無いのです。

そこはとてもきれいで、自分の色を持つ小人達の住む町でした。

けれど、明るく楽しそうに笑いあう小人達の中に、エモに話しかける者はたったのひとりも居ませんでした。

『人はこんな時、悲しくなる』

エモは、この前読んだ本にそう書いてあったことを思い出しました。
でも、エモには『こんな時』の悲しさがわかりません。
だってこれは、彼女にとってはあまりにも日常で、それ以外の物を感じたことなんてなかったのですから。

一歩、一歩と前へ進むと、シンプルな真っ白いワンピースが、ふわり、ふわりとなびきました。

エモのお家は、町のはずれにありました。白黒のお家です。
中に入ると、壁一面に並んだ本が出迎えてくれます。エモは本が大好きで、毎日本を読んでいます。
そこはとても安心できて、エモが一番好きな場所でした。

「よいしょっ……と、」
炉の上にお鍋を置くと、何かがかつんと音を立てました。
今日、森のいちばん大きな木に貰った首飾りです。
それは円い形をしていて、真ん中に開いた円い穴を、黒い涙型がお花のような模様になるように囲っています。
さわるとつるつるしていて、傾けるとつやがぴかぴかします。

この首飾りとあの大きなお鍋を使って、エモは虹を作るのです。
そうすれば、虹色が見つけられるはず。そう、いちばん大きな木が教えてくれました。

さぁ今日はもう寝ましょう、エモはとても疲れています。

布団に入るといつも、エモのまぶたの裏には町の人たちの笑顔が浮かびます。
きらきらと輝く、エモには無いものです。
「虹色が見つけられたら、わたしもあんな風に笑えるのかなぁ？」

憧れだけを胸にして、エモは眠りへと堕ちてゆきました。

笑顔への憧れ、白色。

第一話　ｗｈｉｔｅ（後書き）

第一話、読んでくださってありがとうございます。
今回は、オフラインのお友達のリクエストで、虹に関するお話を書かせていただきました。
最後まで読んでいただけると幸いです（＾－＾）

第二話　ORANGE

エモは困っていました。

お鍋と首飾り。

両方とも、一体どうやって使えばいいのか分からないのです。

本をたくさん読みましたが、どうにも答えが見つかりません。

そんな時に、扉を叩く音が聞こえました。

とんとんとん、とんとんとん。

「こんにちはーっ、居ませんかーっ？」

エモはびっくりしました。誰かが訪ねて来たことなんて、今までに一度も無かったのです。

それなのに、どうして？

とんとんとん、とんとんとん。

扉の向こうから、男の子の声が聞こえます。こんにちは、こんにちは。エモって子のお家はここですか？

がちゃ。

「こんにちは！　キミがエモ？」

「う、うん……」

その小人の男の子は、チョンと名乗りました。水色の帽子、黄色の肩掛け。橙色のシャツに、黄緑色の半ズボン。とってもおかしな格好をしています。

チョンは、いちばん大きな木に聞いて、エモのところへ来たと話しました。
「ねぇ、キミ、虹を作るんだよね？」
「うん、そうだよ」
「僕も仲間に入れてくれない？」
「！」
エモはまたびっくりしました。白黒の子と仲間になりたいなんて小人は、普通は居ないのです。白黒の子とはかかわらないと言うのが、小人達の常識です。
「僕の色は、透明なんだ」
エモがびっくりしていると、チョン話し始めました。
「どんな色にもなれるんだけど、どんな色でもないんだ」
どんな色にもなれるんだけど、どんな色でもない。エモには、少し意味がわかりませんでした。そもそも、透明色の人なんて聞いたことがありません。エモはまた少しびっくりしました。
「だから、虹が作りたいの？」
「うん。それに僕、色が見えないから、困ってたんだ。でも、エモって虹を作る子の所に行けば色が見えるようになるよって、いちばん大きな木が教えてくれたんだ」
「でも、でも、わたし、作り方もまだよくわからないし……」
ばたんっ
「え？」
突然、エモの視界からチョンが消えました。
なんということでしょう、床に倒れてしまっています。
「うわわ、ち、チョン、くん？　どうしたの、大丈夫？」
ぐぅぅぅ。
大きな音で鳴ったのは、チョンのおなかの音でした。

「ありがとう！　僕、ごはん食べ忘れてたんだ」
そう言いながら、チョンはエモが作ったごはんをもりもり食べました。
エモは、本で読んだ『常識』に従って、倒れた人を助けただけだったので、チョンがこんなに喜んでいるのを見てびっくりしました。さっきから、チョンにはびっくりさせられっぱなしです。
そんな間にも、チョンはがつがつ、もぐもぐとごはんを食べました。
エモは、何だか可笑しくなって来てしまいました。くすくす笑いが抑えられません。
「ふふ、食べ忘れるの？　変なの」
「うぐ、ぼぐ、……、いろんなこと忘れやすくって。えへへ。でもこんなにおいしいごはんが食べられたから、食べ忘れててよかった」
チョンが嬉しそうに笑ったので、エモもなんだか嬉しくなりました。
それから食事をする間、チョンはくるくると表情を変えて、エモを楽しませてくれました。
そして、チョンは何度も何度も「ありがとう」と言いました。

「エモ、本当にありがとう！　また来るね！」

そう言うと、チョンは帰って行きました。最初の目的は、もう忘れてしまったようです。

また来るね。

「うん……！」

エモは、もうチョンには聞こえないと分かっていたけれど、小さく答えました。

すると、ぱぁっと胸元にあたたかさを感じます。

びっくりして見てみると、なんという事でしょう、首飾りに、お花がひとつ、咲いています。

ささやかで小さい、でも鮮やかな橙色の華。

「わぁ……っ」

橙色はきらきら輝いて、エモの胸元を飾ります。

初めて自分を飾る色は、それはそれは嬉しく、エモはいつまでもにこにこして、それを眺めていました。

お友達が出来た日、橙色。

第三話　YELLOW

チョンが来た次の日、エモはまた困っていました。

首飾りのお花。

このお花を、一体どうすればいいのか分からないのです。

本をたくさん読みましたが、どうにも答えが見つかりません。

お鍋を覗き込んでみますが、なんにもわかりません。

お鍋で揺れる今日の朝露は、静かにエモの顔を映し出しています。

朝露を入れなさい。いちばん大きな木が教えてくれたのは、それだけでした。

首飾りを手の上に乗せて眺めても、やっぱりなんにもわかりません。

「はぁあ……」

溜息をつくと、息がかかったのでしょうか、お花がぼこっと首飾りから取れてしまいました。

「わっ」

ぽちゃん。

お花はお鍋の中に落ちてしまいました。

花びらが水の上にふわあっと広がり、橙色が滲み出ます。

「あわわ、どうしよう！」

見る見るうちに色を広げて、とうとう花びらは完全に溶けてしまいました。

「ああ……」

そんな時に、扉を叩く音が聞こえました。

とんとんとん、とんとんとん。

「こんにちはーっ、エモーっ、また来たよーっ！」
チョンです。昨日の言葉のとおり、また来てくれたのです。
エモは走って扉に向かいました。
「チョンくん、どうしよう！　お花が、お花が取れて、消えちゃったの！」
そう言って、エモはチョンに昨日首飾りに咲いたお花の事を話し、お鍋を見せました。
「どうしよう、チョンくん、いちばん大きな木さんから、何か聞いてない？」
「……」
「チョンくん？」
お鍋を覗き込むチョンに訊きますが、なぜだか返事がありません。
チョンは橙色に染まった水に釘付けのまま、ぴくりとも動きません。
「チョン、くん……？」
もう一度訊くと、チョンは今度は物凄い勢いで顔を上げました。
「エモ！　エモ、どうしよう！　見えるんだ！」
「な、なにが？」
「お鍋の水の色！　これ、何て言うの？」
「……！」
「ねぇ、エモ、これ何色？」
「……橙、色！」
チョンは、お鍋を覗き込んで、橙色が見えるようになったのです。
どうしてかはわかりません。でも、チョンはみかんの色、にんじんの色、自分のシャツの色が見えるようになったのです。
「やったね、やったね、チョンくん！」
「うん！　橙色、橙色。ぼくの服の色、橙色！　ほら、エモ、きみの首飾りにも、小さいきれいな橙色！」
「え？」
エモが首飾りを見ると、黒かったはずの涙型がひとつ、橙色に、

宝石のように輝いています。
「わぁ……っ」
実は、エモはお花が取れてしまって少し残念に思っていました。
せっかく白黒以外のものを身につけられたのに、それが無くなってしまったからです。
けれど、今、またひとつの輝きが、エモを飾ってくれています。
「嬉しい！　チョンくん、嬉しいね！」
「うん！」

二人は手をたたきあって喜びました。
そして思いました。
きっとこれから、もっともっと、たくさんの色が手に入る。
嬉しいことは、まだまだ、たくさん待っている……！

するとまた、エモは胸元にあたたかさを感じました。
びっくりして見てみると、首飾りに、お花がひとつ、咲いています。
ささやかで小さい、でも鮮やかな、黄色の華。
「黄色……！」

さぁさぁ、お鍋にお花を溶かしましょう。
見れば今度は、バナナの色がわかるようになりますよ。

希望を見つけた日、黄色。

第四話　ｂｌａｃｋ

エモは、またまた困っていました。

首飾りに、お花が咲く。

でも、このお花が一体どうして咲いたのか、エモには分からなかったのです。

本をたくさん読みましたが、どうにも答えが見つかりません。

お鍋には、橙色と黄色がゆらゆらしています。

今日はチョンも来ないので、エモはおやつを持って散歩に出かけることにしました。

エモは、いつも草むらで散歩をします。

道も無いし、危険が多いと言って、他の小人はめったにここへは入りません。

けれど、エモは知っていました。ここはやさしい物ばかりで、なんにも危険は無いと言うことを。

けれど、エモは知りませんでした。ここに入って行くから、小人のみんなに気味悪がられていると言うことを。

顔を上げると、エモよりずっとのっぽの草、みずみずしい緑色の合間から、太陽の光が降り注ぎます。

「緑色のお花も、いつか咲くのかなぁ？」
ペンダントを見ると、橙色と黄色の宝石が輝きます。あとの涙型は、まだ深い黒色のままです。

「やぁ、エモじゃないか。久しぶりだね」
突然、声をかけられました。
振り返ってみると、そこには真っ黒な体、６本の足。
「アリさん！」
蟻は、エモの仲間でした。黒いからです。
「困った顔をしていたけれど、何かあったのかい？」
蟻はいつもエモのことを気遣ってくれます。
エモにとって、蟻は、とっても安心できる、お家のような存在でした。

エモが虹作りの話をし、どうやって花が咲くのかが分からないと言うと、蟻はうーんと少し考えた後、話し始めました。
「エモ、色にはね、たくさんの意味があるんだよ」
「意味？」
「そう。たとえばこの黒。黒には安心っていう意味があるんだ」
「安心！」
「心当たりがあるだろう？　だからね、エモ。ほかの色の意味も考えてみるといい。たとえば、その橙や、黄色。そうすれば、きっとどうすれば良いのかが分かるはずだよ」
橙色と黄色の意味。少し考えただけでは、エモには分かりません。
「ありがとう、アリさん。頑張って考えてみる！」

おやつを分け合った後、エモは蟻と別れました。

「色の意味かぁ……」

ふぅっと風が吹き抜けると、エモの髪がさらりと揺れます。

白黒のお家に帰ると、いつもどおり、壁一面に並んだ本が出迎えてくれました。

やっぱりそこはとても安心できて、エモが一番好きな場所でした。

いつもの安心は、黒色。

第五話　BLUE

「エモ、エモっ！」
エモが色の意味を探すために本を読んでいると、扉の向こうからチョンの声がしました。
扉を開けると、チョンはいつものようににこにこしています。しかし、今日チョンが言い出したことは、いつもとは違いました。
「ねぇエモ、一緒に外に出かけようよ！」
「え？」
「僕ね、とってもいいもの見つけたんだ。ね、一緒に行こ！」
「ちょ、ちょっと、チョンくん、待って……」
エモはそう言いましたが、チョンはそれに構わず、エモの手を引いて駆け出してしまいました。

「こんにちは！」
「やぁ、チョン！」

「こんにちは！」
「おや、チョン。こんにちは」

エモとチョンは、町に来ていました。
チョンはみんなと挨拶を交わして、笑顔で会話をしています。
けれど、エモはただチョンの影に隠れていることしか出来ませんでした。

「エモ？」

「……」
「エモ、どうしたの？」
「……チョンくん、帰ろうよ……」
「どうして？」
「……町は、怖いよ……」

エモは、ずっと町の人の笑顔に憧れていました。
けれど、最近、町の人が怖くなってしまったのです。
エモは気が付いていました。
町の人々は、チョンには笑いかけても、エモとは目も合わせようともしないことに。
前までは、それも気にかけはしなかったはずです。それが当たり前、日常。それ以外のものは感じたことが無かったからです。けれど、チョンに会って、笑いかけられてから、エモは気が付いてしまったのです。
それはとても、悲しいことだと言うことに。

「ねぇ、エモ、そんなに怖がらないで。ここには怖い事はなんにもないよ」
「でも……」
「大丈夫だよ。ね、僕が一緒にいるから」
「……チョンくんは……私が挨拶しても、大丈夫だと思う……？」
「もちろん！」

チョンにそう言われて、エモは少し安心しました。

そして、二人はまた町の小人とすれ違いました。
「こんにちは！」
チョンが言います。
「こんにちは、元気がいいね」

町の小人が答えます。
「こ、こんにちは……」
エモはぺこっと頭を下げて言いました。
胸はどくどく鳴っているし、ぎゅっと握り締めた手には汗がにじんでいます。
でも、エモは勇気を出して言いました。町の誰かに挨拶をするなんて、初めてのことです。
エモが顔を上げると、町の小人と目が合いました。

エモは、暗い部屋にひとりでうずくまっていました。
壁一面の本が、エモを見下ろしています。

お家の中にある色は、白と、黒。あとは、たったのわずか、お鍋の中に橙と黄色。そう、それは本当にわずかなのです。

それに、エモの胸元で揺れる青色の華。

どんどんどん、どんどんどん、

扉をたたく音がするけれど、今のエモには、もう怖くて開けられません。

今日、初めて目を合わせた、町の小人の瞳を思い出します。

エモを見るのは、凍りついた眼差し。

町は怖い。

人が、怖い。

きっとみんな……みんなわたしを……

悲しさが駆け巡る日、青色。

第六話　RED

やっとの思いで扉を開けると、そこにはチョンが立っていました。いつの間にか雨が降り出していたようです。チョンはずぶ濡れでした。

「エモ、ごめんね、あの人、エモの事勘違いしてたんだ。でも、エモはとっても優しくて、料理が上手だって言ったらわかってくれたよ」

「……」

「エモ……？」

「だめだよ……」

雨の音が、聞こえます。

「だめって……何がだめなの？」

「……わたしは、みんなと一緒に居ちゃだめなの……」

「どうして？」

「……っどうしてって！　だって、みんながわたしを嫌ってる！白黒の子は、忌まわしい、感情が無い、気味が悪いってみんな言ってる……！」

「そんなことないよ！　エモがそう思い込んでるだけだよ！」

「違う！　みんながわたしを嫌いなの！」

「なんでそんな事わかるのさ！」

「わたしが……わたしが、わたしを嫌いだからだよ……」

白黒の子は、感情があまりありません。
感動が、出来ないのです。
エモは、そんな自分が大嫌いでした。

「……わかった……」
「……」

雨の中、チョンはひとり、帰って行きました。

「――……あ……」

どうして、あんな風に言ってしまったんだろう。
どうしてあんなに怒ってしまったの？

チョンくんは、ずぶ濡れになっても、わたしに会おうと、扉をたたき続けてくれたのに……。

気が付くと、青い華は床に落ち、首飾りには赤い華が咲いていました。

でも、全然嬉しくありません。

むなしさだけが、そこには残っていました。

本気で怒った日、……赤色。

第七話　GREEN

外に出ると、辺りは真っ暗で、つめたい雨が降っていました。

チョンは、こんな中で、ずっとエモを呼んでいてくれたのです。なのに、どうしてあんな事を言ってしまったのでしょう。エモの目から、涙が溢れ出ました。

エモは考えました。

みんなが私を嫌ってる。白黒の子は、忌まわしい、感情が無い、気味が悪いってみんな言ってる。ずっと、そう思っていた。

でも、それは本当なの？

エモがいつも散歩をする草むらは、道も無いし、危険が多いと言われています。

けれど、あそこはやさしい物ばかりで、なんにも危険は無いと言うことを、エモは知っています。

エモが思う町は、とても冷たくて、恐い所でした。

けれどチョンは、町には怖い事はなんにもないと言いました。

「知らないだけなのかなぁ……」

エモの呟きは、降り続く雨の音に掻き消されます。

一歩踏み出すと、ぱしゃん、と、水がはぜました。

――透明の子は、色が見えませんでした。
最初から、世界は白と黒だけだったのです。
色で全てを判断するこの社会。
透明の子は、なんだか自分は仲間はずれのような気がしました。
『でもね、チョンは頑張って社会に入って行ったのよ。色が無いから、みんなの色を
見て、それを学んでね。そうしてみんなと仲良くなっていったのよ』
「そっか……」
エモは、いちばん大きな木の所に来ていました。
いちばん大きな木は、ゆっくりと、チョンのお話をしてくれました。
エモの知らなかったチョン……。頑張って頑張って、チョンはあの、明るくて優しいチョンになったのです。
「それなのに、わたしは、何にもしてない……」
『そんなことないわ、エモは虹を作っているじゃないの』
「でも……」
『でも?』
「もっともっと、やらなきゃいけないことがある気がするの……」
雨はやんで、いつの間にか朝日の光が顔を見せ始めていました。
露が光に反射して、とっても綺麗につやめいています。
「あ……」

エモはお家に帰って、お料理をし始めました。
こんなにたくさんを作ったことはなかったので本当に大変でしたが、今日、エモはお料理をするのをとっても楽しく感じました。
「熱っ」
うっかり、指に火傷をしてしまいました。
「……っ」
でも、エモはまだまだお料理を続けます。ほら、冷やせば大丈夫。
お鍋の中には今、赤、青、橙、それに黄色が揺らめいています。

エモはお料理をしている間、チョンのことを考えました。
チョンは、今まで色が見えなくて、苦しいことや、悲しいこともたくさんあったでしょう。
優しいチョン。いつも、いつも笑っていました。
でも、笑っていたけれど……もしかしたら、辛い時もあったのかもしれません。
だって、その笑顔は他人色。
自分の色ではないもので居る事は、時に憤りをも感じさせたでしょう。
「はやくチョンくんに、全部の色を見れるようになって欲しいな

……」

そうすれば、何かが変わるかもしれないから。

「……できたっ！」

いつの間にか、首飾りには緑色のお花が咲いていました。

さぁ、町へ出かけましょう。
町には怖い事なんか、なんにもないのです。

誰かを思って何かをした日、緑色。

第八話　ＩＮＤＩＧＯ

その日は、とっても気持ちよく晴れた日でした。
時間はちょうどおやつ時。

さぁ、勇気を出して、エモは歩き出します。

「こ、こんにちはっ、おおお菓子、つくったので、食べたい人、あげるので、どうぞっ」

ここは町の通り。
エモは、詰まりながら、大きな声で言いました。
顔が燃えているように熱いです。冷や汗が吹き出ます。不安で不安でたまらないけれど、でも、エモはここで諦めるわけにはいかないのです。

「こんにちはーっ」
町の小人達は、みんなエモの方を見て見ぬふりをします。
そのたびにエモは悲しくなって、涙が零れ落ちそうになりました。
でも、でも……諦めるわけには、いかないのです。

どれくらい、時間がたったでしょう。

「……こんにちは」
「！」
いちばん最初にエモに声をかけてくれたのは、昨日、エモを凍った目で見た町の人でした。
群青色の小人です。
「……こっ、こんにちは！」
エモが大きな声で挨拶をすると、その小人は申し訳なさそうに微笑んで言いました。
「昨日は、ごめんね……。ひとつ、もらえる？　チョンが、あなたはお料理が得意だって言ってたから……」
「……っはいっ！」
エモがお菓子を渡すと、その小人はもう一度笑って、ありがとうと言って去って行きました。

それから、少しずづ、少しずつ、エモのお菓子はもらわれていきました。
「すごく良い匂いがするね、あなたが作ったの？」
「君が白黒の子？　なんだ、全然良い子じゃない！」
「また作ってきてくれる？」

エモのお菓子をもらって行ってくれる人は、そんなに多くはありませんでした。
でも、エモがふれた小人達は、みんなあたたかくて、思っていたより全然怖くなんかありませんでした。

「お花の首飾り？　きれいね」
「え？」
気が付くと、首飾りには藍色のお花が咲いていました。
「いつのまに……」

そういえば、最初はお花が咲くときに、胸にあたたかさを感じました。
それなのに、いつからでしょう。お花は知らないうちに咲くようになっていました。
「あら、でも……これと同じお花、さっき見たわ。菫色の……どこにあったのかしら、忘れてしまったけれど」
「菫……？」
まさか、と思いました。
そうっと、首飾りから藍色のお花を取ってみると、なんということでしょう、黒い涙形がひとつもありません。
赤、橙、黄、緑、青、藍、菫。７つのきらきら光る宝石が、そこにはあります。
「まぁ、虹色ね……！」

エモはその人にありがとうと言うと、片手に残りのお菓子の袋、もう片手に藍色のお花を持って、お家へ向かって走り出しました。

お菓子の袋は、まだまだたくさん残っていました。
でも、エモは感じていました。
持ってきたときよりも、少しだけれど、それは軽くなっているということを。

その分だけ、エモの何かも、軽くなっているということを。

走っているうちに、声が聞こえました。

「このお菓子、本当においしいね！」
「うん、白黒の子って、ホントはぜんぜん怖くなんか無いのかもしれないね」

全速力で駆け抜けると、エモの髪はさらりと揺れます。

諦めずに努力した日、藍色。

第九話　ＶＩＯＬＥＴ

エモはお鍋に藍色の華を入れ、荷物を置いて、また町へと駆け出して行きました。

エモの知らない間に、菫色の華は咲いていたのです！

町のどこかに落ちているはず。でも、どこでしょう？　昨日はずっとチョンの後ろに隠れていたので、どこをどう歩いたのかも覚えていません。

「どうしよう……！」

空に広がるオレンジ色が、もうすぐ辺りが暗くなってしまう事を告げています。

早く見つけないと、お花は枯れてしまうかもしれない。

エモは焦りました。

けれど、あっちを探しても、こっちを探しても、菫色のお花は見つかりません。

「どうしたの？」

突然、声をかけられました。

振り返ってみると、そこには小人が三人、居ました。

「お昼にお菓子をくばってた子だよね？」

「あれ、すごくおいしかったよ！」

「困ってるみたいだけど、何かあったのか？」

「……！」

エモは嬉しさで胸がいっぱいになりました。町の人が、自分からエモに話しかけてきてくれたのです！

エモが菫色のお花を探していると言うと、三人は探すのを手伝ってくれました。

「菫、スミレ……」
「菫って、俺の色だ！」
「そんなの知ってるよぉ」
「ねぇ、菫色にはどんな意味があるの？」
「菫色は、勇気って意味があるんだ！　だから俺は勇敢なんだぞ！」
「橙は友情！　あたし、お友達大好き！」
「ぼくは、ぼくは桃色！　桃色は……」
「かわいー」
「うるさーいっ」
「わたしは、……わたしは、白と黒。黒は、安心。でも、白は知らないの……」
「白は憧れよ！」
「すごいなぁ、エモちゃん、二つも色があるの？　いいなぁ～」
「いい？」
「うん！　いいよ！」

そう、色の意味なんて、町に来ればすぐに分かったのです。町には色を持っている人がいっぱい居ます。だから、みんな色の意味を知っているのです。

赤は怒り。
橙は友情。
黄は希望。
緑は思いやり。
青は悲しみ。

藍は努力。
菫は勇気。

「でもね、色の意味は一つだけじゃないの。おんなじ色にも、いろんな意味があるんだよ！」
「へえ……！」

「ねぇ、菫色！　これじゃない？」
桃色の男の子が言いました。
駆け寄って見てみると、
「これ……！」
それは、確かに首飾りに咲く華でした。
「ありがとう、みんな、ありがとう！」
「どういたしまして」
「またお菓子くれよな」
「僕が見つけたこと忘れないでねっ」
桃色の男の子がそう言うと、みんなで笑ってしまいました。

みんなが帰ったあと、あらためてお花があった場所を見てみると、そこは、昨日群青色の小人に会ったところでした。
「ここで、勇気出したから……」
ムダじゃなかったんだ。
そう思うと、嬉しくなりました。

さぁ、お家に帰りましょう。白黒のお家へ。
これで、虹が作れるのです。

勇気を出したあの日、菫色。

第十話　transparent

七つの色が、お鍋の上にたゆたっています。
七色の宝石が、エモの胸元で輝いています。

けれど、エモは、また困っていました。

お鍋の中の七色のお水と、首飾りの七色の宝石。
両方を、一体どうやって使えばいいのか分からないのです。
本を読んでも答えは見付からなさそうなので、今日は本で調べるのはやめました。

お菓子を配っている時、こんなことを言われました。
「綺麗な首飾りね。自分で作ったの？」
エモはいいえと答えました。いちばん大きな木がくれたものだからです。
でも……そういえば、このきれいな宝石は、その後に出来たものです。
自分で作った
とは、言えないでしょう。
チョンが居たから、ここまで来れたのです。

「チョンくん……」
怒ってるかなぁ。
あんなにひどく怒鳴っちゃったんだもん。きっと怒ってる。
せっかく、わたしをなぐさめようとしてくれたのに……。

エモは、チョンのところまで走って行きたいという気持ちでいっぱいでした。

けれど、エモはチョンのお家がどこにあるのか知りません。そう、エモはチョンのことをほとんど知らないのです。

空に虹を掛けることが出来れば、きっとチョンは分かってくれるでしょう。

色が全部そろった事を。エモが、いろんなことを感じた事を。

でも、どうやって掛ければいいのか……エモにはわかりません。

お家の中は、とっても静かでした。

エモは、ずーっとここで暮らしてきたのです。

寂しいと思ったことは一度もありませんでした。たくさんの本があったからです。

でも、今は……

「チョンくんが居ないと、さびしいな……」

ちゅん、ちゅん。

「……？」

朝でした。知らないうちに、眠ってしまっていたようです。

お風呂に入って、朝ごはんを食べました。

「町に……行こうかな……」

町に行けば、チョンに会えるかもしれない。
いつしかエモは、チョンのことばかりを考えていました。

いつもの帽子に、いつもの白いワンピースを着て、白黒のお家の扉を開けます。
ごんっ
「……え？」
何かに当たりました。なんでしょう？
「いたたた……エモぉ、ノックする前に、開けないでよぉ……」
そこには、チョンが居ました。痛そうに鼻を押さえています。
「チョン、くん……！」

目の前のチョンに、ありがとうとか、ごめんねとか、言いたいことはいっぱいありました。
でも、エモはなんにも言えずに、ただ、泣き出してしまいました。
「エモ、どうしたの？　エモもどっかいたいの？」
「ち、ちがうよ、ち、チョンくん、」
「ん？」
「嬉しいよぉ……」
チョンにまた会えて、チョンがまたエモの所に来てくれて、エモはとっても嬉しかったのです。
涙が出るほど、感動したのです。

涙はエモのほっぺを伝って、首飾りに落ちました。

「エモ、エモ泣かないで」
「うん、うん……」

「……チョンくん……」
「ん？」
エモが顔を上げると、チョンは優しく笑いかけてくれました。
その瞳はとても澄んでいて、エモを小さく映し出します。そして、エモは言いました。
「嬉しいよ。チョンくんが笑ってくれて、わたし、本当に嬉しい。でも、でも、――……」
「エモ……？」
言葉に詰まります。でも、どうしても、伝えたい。
「……無理な時は、笑わないで……」
エモはいちばん大きな木のお話を聞いてから、ずっとチョンにそう伝えたいと思っていました。
これ以上チョンくんには無理をさせたくない。そう思ったのです。
けれど、これを言って良かったのかどうか、エモには分かりませんでした。
チョンは、いつも頑張って笑っているのです。本当の自分を見せて、相手に嫌な思いをさせないように。嫌われてしまわないように。頑張って、頑張って。
けれど、エモの言った事は、チョンの頑張りを否定する言葉でした。
エモの言葉を聞いたチョンは、少し驚いたような顔をしていました。
そして、ふっと優しく笑って、言いました。
「エモ、透明色の人って、どんなだと思う？」
「え……？」
今度はエモが驚いてしまいました。そんな事を言われるなんて、考えもしていなかったのです。
チョンは話を続けました。

「透明は、どんな色でもない。でも、どんな色にでもなれる。エモはもう知ってるかもしれないけど……ホントは、透明の人は、僕は……感情なんて、無かったんだ。だから、笑うのも、泣くのも……みんな、誰かの色のモノマネ。ホントは、心の中では何にも思ってなんかなかった。ただ、今笑わないと、今泣かないと、みんなに嫌われちゃうとだけ、思ってた。でも、今は違うんだ」

「違うの……？」

「うん。僕ね、ホントの心でみんなと接せなくて、凄くもやもやした時もあったよ。でもね、いつの間にか……」

そう言うと、チョンはエモの目を見て、もう一度優しく、にっこりと笑いました。

「ほら」

「？」

「僕、エモの顔見たら、笑わずには居られなくなっちゃったんだ」

透明の子は、いろんな色に染まりました。

それは全て他人色。自分の色ではなかったのです。

心はいつも空っぽで、顔と言葉だけを動かす毎日。

けれど、なぜでしょう、いつの間にか、心から笑ったり、想ったり出来るようになっていたのです。

沢山の感情に触れるうちに、透明の新しい意味を作り出していたのです。

『いつの間にか』。チョンはそれがいつなのかを知っていました。

それはあの日、もやもやに押し潰されそうで、ごはんを食べる事さえも心に留めていられなかった孤独の日。

初めて『自分が透明色だ』と伝えた人が、そんな事を全く気にしないように笑ってくれた時。

そう、エモの笑顔を初めて見た時。

あれから、本当に嬉しく、優しい気持ちで、笑えるようになり始めたのです。

そして、橙色と黄色を目にしたあの日、チョンはやっと町の人に自分の色を明かす事が出来ました。

みんなに嫌われたとしても、きっとエモとの友情だけは残ってくれると思ったから。

その希望が、胸の中で輝いたから。

ああまた、エモの目から、涙が零れます。

——透明は、何色なのだろう。エモは考えました。

きっとそれはチョンだけの色。

優しい優しい、透明色。

第十一話　RAINBOW

涙の雫が、ぽつりぽつりと、首飾りに落ちます。
雨のように、静かに、静かに。

「エモ、お鍋、外に持ってこうよ」
突然、チョンが言いました。
「外？」
エモはやっとおさまった涙を拭いて、チョンに問います。
「うん。だって、虹が掛かるのは外だよ！」

そうして、二人はお鍋を外まで持って行くことにしました。
エモがひとりで運んだ時、お鍋はとっても重かったのに、チョンと二人で運ぶととっても軽く感じました。

お鍋の中のお水をこぼさないように、ゆっくり、ゆっくり運びます。

「チョンくん、全部見えるようになった？」
「ううん、まだ！　虹ができるときにする！」
チョンはもったいぶって、まだお鍋の中を覗き込んでいないのでした。

「ねぇ、エモ。僕がいちばん好きな色、何色か分かる？」
「えー？　だってチョンくん、まだちょっとの色しかわかんないでしょ？」

「でも、全部の色が見えても、これは変わらないよ。ねぇ、当ててみて」
チョンはとってもにこにこしています。何がそんなに嬉しいんだろう？　エモは不思議に思いました。
「うーん、橙？　最初の色」
「ブー」
「じゃぁ黄色？」
「ちがうよー」
「これ以外ないでしょー？」
「あるよ！　下ろすよーよいしょっ」
二人は扉を開ける前に、お鍋を床に置きました。
「じゃぁなに？　わかんないよ」
「ふふ、わかんないの？　僕のいちばん好きな色は、白黒だよ！」
「！」
エモはびっくりしてしまいました。
白黒が好き？　そんな人、聞いたことがありません。
「ねぇエモ、僕ね、ずーっと白と黒しか見えなかったんだよ。いろんなものの、本当の色が分からなかったんだ」
「うん」
「でもね、エモは白黒だったんだ。最初から、エモのことだけは、ちゃんと見えたんだよ！　だからだよ！」
エモはあっけに取られてしまいました。
だから？　だから、白黒が好きなの？
「……変なの」
「変？　エモ、ひどいよー」
「変だよ。でも、嬉しいな。」
エモはまた、涙がでてきてしまいました。

「開けるよ！」

そうチョンが言うと、エモのお家の扉が開かれました。
朝日が、差し込みます……。
「よいしょっ」
二人で声をあわせて、大きなお鍋を運びます。
首飾りが太陽の光を受けて、いつよりさらに、美しく輝きます。

「わぁっ」

すると、お鍋が突然軽くなりました。
色水が、空へと上ってゆきます。
「チョンくん、チョンくん、やった！　虹が掛かるよ！」
「うん……！」

チョンは今、すべての色を手に入れます。
赤、橙、黄、緑、青、藍、菫……

「すごいすごい！　虹色って、すっごく綺麗なんだ！」

その虹は、エモのお家から町まで、草むらの端っこでも見えるくらい大きく掛かりました。

「凄い凄い！　きれいだね、きれいだね！」
「うん、うん！」

とってもとっても感動した日、虹色。

最終話　monochrome

「ねぇエモ、僕、この前いいもの見つけたって、言ったでしょ？」
虹を仰いでいると、突然チョンが話し始めました。
「うん」
エモは答えました。いいもの。そういえば、そんなこと言ってたっけ。
「はいっ」
チョンがエモに手渡したのは、白と黒のお花の花束でした。
エモのお家の玄関先に隠していたようです。チョンは、少し照れくさそうでした。
花びらが朝露に濡れて、エモの胸元の宝石と同じくらい、きらきらきれいに輝いています。
「きれいでしょ？　町の向こうでみつけたんだ」
「……っうん……！　ありがとう……！」
エモがお花を受け取ると、チョンはとても嬉しそうな顔をしました。
「チョンくん、嬉しそうだね？」
「？　だって、エモが嬉しそうに笑うから。エモの笑った顔、キラキラしてて、僕、大好き！」

森のいちばん大きな木は、虹を見るといつも思います。今日も、思いました。

嬉しいことがある。

でも、苦しいこともある。

両方あるから、あぁ、なんて世界は美しいんだろう。

なんて、人が愛おしいんだろう。

「ねぇエモ、どうして虹がすぐに掛かったのかなぁ？」

エモが白黒のお花の香りをかいでいると、チョンはたずねました。

「うーん……あ、きっと涙だよ！　虹は、雨の後に出るの！」

「！　エモ、どうしてそんなこと知ってるの？」

「えへへ、あのね、昨日……」

虹が出た日。

やっと見つけた、やっと気付いた。

わたしの色はとても味気の無い物だけれど、虹色みたいに輝くことも、虹色みたいに感動することも、出来るということを……。

それはとてもきれいで、わたしとあなた……そしてみんなの笑顔が輝く、そんな町のお話。

白黒で描かれた、カラフルな町の物語。

最終話　monochrome（後書き）

このお話はここでお仕舞いです。
ここまで読んでくださって、本当に本当に、ありがとうございました…！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2612a/

ジブンイロ=vibgyor=

2010年10月9日22時18分発行